

ペダルをこぐ

松本美保子

ペダルをこぐといっても、はやりの自転車ではない。「ペダル式充電機」のことだ。ダイエットしながら充電できちゃう、と去年の夏ごろテレビで広く紹介されたそうだから、心当たりのある人もいるだろう。両サイドにペダルをつけた発電機と、弁当箱を三段重ねたような充電機をつないだ簡単なつくりだ。使うときは、適当な椅子に腰をかけ、それを足元に一手元でもいい一置いてペダルを回す。それを今、毎日こいでいるのだ。

昨年の春先に起きた震災をめぐる一連の出来事は、今も私たちに多くの示唆を与えつづけているけれど、私がもっとも身近に考えさせられたのが、停電による日常生活へのリスクだった。というのも、自宅マンションでの影響はエレベーターやオートロックだけではない。換気扇が動かないと熱がこもって危険だからコンロが使えず、建物には電動ポンプで揚水しているので水も止まり、はては防火設備すら機能しなくなるおそれがある、などなど。計画停電を前に、それらを管理会社から知らされたときには、ただ、あ然とするしかなかった。

けれど今思えば、そのとき気づかされてよかったのかもしれない。じつはそれから、もっと深刻な事態が「想定」されていたのを知ったのだ。5年前、自治体や内閣府はM7クラスの首都直下型地震が起きたときの被害と復旧工程の予測報告書を出している。それによると電気の「全面」復旧にはおおむね6日かかるとされているのだ。私は漠然と、災害での停電はせいぜい3日くらいと思いこんでいた。でも実際はもっと長く不便をしいられるのもアリなのだ。

不安にかられるままネット検索をしているうちに、神戸で17年前の震災に遭った人のブログに行きついた。当時あって助かったものをいくつかあげ、実体験とともに紹介していた。それらのなかにパソコンがあった。口コミにたよるだけではなく、個人が互いに生の情報をやりとりできたことで、足りないものを融通しあったり、何よりデマに迷わされずにすんだそう。今ならケータイ、いやスマホだろう、とあった。

たしかにケータイは文字通り持ち運べるし、カメラなどがついている。そういえば今回の被災地でも、通信状態さえよければ普通に使えていた。ただ、問題がある。電池だ。何もなくても、もって7日なのに、ワンセグやパソコン替わりにしたらもっと短くなる。

それで思いだしたのが、手回し発電ラジオだ。ケータイの充電機能を使ってみたけれど、この「手回し」

が意外にたいへんで、かなりがんばって回しても1時間しかもたなかった。

本格的にケータイをフル充電できるものを用意するのはどうだろう？ ふだんから使えるものなら、なおいい。なぜなら、いつ要るかわからない防災用品は結果がみえない健康グッズのようなもの。モチベーションをなくせばたちまち押し入れの肥やしだ。何を隠そう、私は昨年2月クライストチャーチで被害のあった地震に縮みあがり、1年半放っておいた非常持ち出し袋と手回しラジオを引っぱりだしたクチなのだ。

そんなわけで条件にあう製品を探し始めた。おりしも、ネットやホームセンターには種々の防災グッズをはじめ節電・発電グッズがあふれている。可愛いケータイ用太陽電池、繰り返し使える充電池、ポータブル式太陽パネル発電機やベランダ用小型風力発電機…。どれもおいおいにひかれたけれど、その時点で値段・容量・使い方と三拍子そろっていたのが、件のペダル式充電機だった。

慣れないうちは、発電効率のいいペダルの回転数—1分間に70~90回—にとまどい、こいでいるあいだは他に充電できないとか、古い掃除機並みの騒音、それに電気釜など使えない小型家電もあること、フル充電まで5時間以上もこぐとわかり、がっかりもさせられた。

でも使ううちに、たしかに売り文句通り二重に得だというのもわかってきた。普通の生活のなか、たとえば新聞や本を読む30分くらいの間に電氣量を増やせるし、持ち運びやすく邪魔にならず、なによりケータイをフル充電できる。以来、自分のケータイは家のコンセントにつながずにすんでいる。…かんじんのダイエットになっているかは、秘密にしておくけれど。

とはいえ、問題の根本的な解決には程遠いし、こんな小さなバッテリーでは、いざというときマンションの揚水ポンプひとつ動かせないのもわかっている。でも今は、できそうなことからやるのが大切なのだと思います。個人的には、2、3年後に、高効率で安価な集合住宅用発電や充電システムが広まっていることを期待している。

1年の計は元旦にありという。ペダルをこぎ、ケータイを充電し続けることを、私の今年の目標にしたい。

ちなみにバッテリーが空になったケータイは、溜めた電氣をたった2時間弱で吸いつくす。小さいくせに大喰らいだ。

了

才能と生きがい

深谷 眞志

盲目のピアニストとして世界的に知られる辻井伸行さんは、幼いころから才能は際立ち、その才能を見抜いた母親は献身的に伸行さんを支え、著名な数々のコンクールに入賞し、見事に才能を開花させた。

しかし、辻井さんのように幼児期から、親が特技を見出し、その才能を伸ばせるような環境を整えることは並大抵のことではない。

子供が大人になる過程で、勉強はもちろん、ピアノやバイオリンなど、早い時期から塾通いやレッスンなどを受けさせ、名門大学へ進学させようと、また、音楽家としての道を歩ませるため、あらゆる努力を傾ける親は多く、その傾向は今も昔も変わることはない。

私は少年時代、北海道釧路まで旅をした時にひとつの記憶がある。

それは、私が小学5年生のとき、父の友人の画家に誘われ、家族と離れ、はじめて経験した約一カ月にわたるホームステイでのことだった。

画家の親戚の家は釧路市内で医院を開業していた。医院は院長である父親自らバイオリンを弾く音楽一家で、家には私と同年代の小学4年生の姉妹が居た。

彼女達は朝から晩まで毎日勉強やバイオリンの稽古に明け暮れ共に遊んだ記憶はない。

ある日、姉妹は東京神田のS堂書店から取り寄せたという国語辞典を見せびらかせた。私は家から歩いてすぐの書店だと言うと羨ましそうな眼をした。

駄菓子屋や模型店は身近な存在だったがS堂書店は私にとって無縁の存在だった。

勉強の苦手だった私は幼い頃から絵を描くことが好きだった。

それは、絵かきでもあった伯父の影響もあったかもしれない。その兄の血をひく母も気が向くと小さな画帳に巧みに人物や風景などを描いていた。

私が通った小学校は、成績万能主義ではなく、生徒の長所、得意な科目、分野を伸ばすよ

うな、自由でのびのびとしていた教育方針が貫かれていたことも影響したように思う。

才能はなかったが図画工作の時間は楽しみで、絵画など早く描ききると、教師に依頼され、教師が不在の時などクラスメートのアドバイスをを行ったこともあった。

もっとも、図画工作以外は惨憺たるもので、総合成績は下位だった。しかし、区立のH中学に進学すると様相はさらに一変した。

H中学は区外から越境して入学してきた優秀な生徒が群がる進学校で、成績は瞬く間に引き離され、授業には全くついて行かれない状況になってしまった。

好きだった図画工作も美術という科目になり、実技より美術史や理論が重視され絵を描く興味は薄れていった。

この時期、父の事業の失敗などから、住み慣れた生家も人手に渡るなど生活は激変し、その後、進学した高校では父への反発がエスカレートし、不登校を繰り返し二度の転校を経験する。

子供が大人になる大切な時期に、何故勉強しなければならないのか自覚出来なかった私は、出口の見えない迷路のような道を辿り続けた。

もちろん、成績の不振も父への反発もすべて甘えであり、私の幼さ、弱さから来たものだった。しかし、この頃の自分にはどうすることも出来なかった。

子供の頃からの特技や才能を伸ばし、その道を極めていくことは陰しく、そして困難であることは違いない。しかも、長い人生の間には、好きだったことに興味が持てなくなったり、逆に新しい世界が開け、興味を抱いたりする。

不登校を繰り返していた時期、私には唯一心が落ち着ける時間があつた。それは読書だった。

祖母から頼まれ、書店で求めた小説がきっかけとなって読書の楽しみを知り、以来、歴史小説を中心に読むようになった。そこには、自分でも知らなかった新しい世界が広がっていた。

中でも最も魅かれたのは奇しくも最初に出会った作家の作品で、今も繰り返し読み続けている。いずれも海に題材をとったものや、幕末を舞台にした作品が多く、歴史の表舞台に現れることのなかった史実の重みや、史実に沿って

展開する壮大なストーリーは、真実だけが持つリアルティーに溢れたもので私は完全に歴史小説の世界にのめり込んでしまった。

私はその後、幕末に起こった様々な事件に興味を覚え、ある業界誌に4年にわたって連載し、私の居住する杉並区から依頼されおこがましくも講演まで行った。

最近、生まれ故郷である神田の歴史について、町会に懇請され、地域のタウン誌に寄稿する傍ら、幕末をテーマとした歴史ウォーキングを開催し、新しく住民となったマンションの方々にも地域の歴史を知ってもらえればと活動を続けている。

半世紀前、有名書店の辞書を取り寄せてまで必死に勉強していた医院の姉妹は、親の期待にこたえ、名門学校に進学し音楽家や女医になっているのだろうか。

彼女達が必死で勉強していたとき、私は北海道への旅の途中、青く雄大な太平洋の光景を船上から眺め、毎日のように足を向けた釧路機関区では、夥しい蒸気機関車から発せられる汽笛に、遠く離れた家族の顔を思い浮かべていた。そして、このとき、はじめて家族ということについて客観的に考えられるようになったことは

間違いない。そして、この旅は私を一層船好きにし、その後多くの旅に出るきっかけともなった。

子供が大人になる過程で学ばなければならないことは多い。しかし、学ぶべきことがらは学校だけが全てではない。親元を離れて旅をすることも必要なことではないかと思う。そこには机上では得られない様々なことが埋れている。

子供の、なにものにも捉われない純粋な目で見、触れ、経験したことは後年、なんらかのかたちでプラスになり、役立つ時がやってくる。

多くの経験と、出会いは様々に絡み合い、人生の新たな扉を開かせ、思いもしなかった世界に導かれるようにも思う。

旅から半世紀を経て、私は自分に相応しい生きがいを見出しているのかもしれない。しかし、経験を役立たせるか、埋もれさせるか、それはすべて自分の生き方にかかっている。

プロフィール

(社)日本自動車整備振興会
歴史作家

“国民の声”と言う、……虎の威を借る政治家さん達

「虎の威を借るキツネ」、と言う諺がある。

「偉い人の力を借りて、いばる」と、手元の辞書にある。

事ある度に、俺には誰々が着いているとか、有名なあの人は俺の親戚筋だとか、本人は何も実力はないのに、後ろ盾に何々がいると言って「意気がる」ことを言う(実際は後ろ盾でも何でも無い)。

酒を飲みながら、わいわいガヤガヤと、庶民的な「意気がり」なら、まだ可愛いもんだの、範囲に収まりもする。

ところが最近の政治家さん達は、何処か変だ。

国民の声を真摯に受け止めとか、国民一人一人の声に耳を傾けてとか、国民の目線に立って政治を行って参りたいとか、少なくとも表面的には、素直な政治家の姿に見えるが、……実はこれが曲者である。

税金を嘘偽り無く、遅滞無く納めている善良な国民の一人として、……仮に、私が国民の声とやらを発するとすれば、……発すると言うより、「何かを欲する」形となり、相当に「独善性」の強いものとなる。

極端に言えば「自分だけよければ」、あるいは「自分の身内だけよければ」それでいい、こんな欲に集積される。

勝手に決めつける積もりは無いが、多くの国民の声も、また似たようなものである。

実際、国家意識で決めるべき事柄までも、国民の目線に下げてしまったため、「にっちもさっちも」行かない事象が生じている。

こんな不幸な、国家・国民現象は無い。

個人の「欲の皮の突っ張った声」に一々応えていたら、国家予算が幾ら有っても足りない、……イヤ、国が成り立って行かない。

国家全体を見渡せる、そんなバランス感覚の取れた一般国民の声など、実際に存在するものだろうか。

いつの時代もそうであろうが、国民の声とは独善性が強く、バランス感覚の悪いものと相場は決まっている。

そんな独善性、且、バランス感覚欠如の国民を、豊かなバランス感覚と、逞しきパワーでリードしてくれるのが、「政治」であり「政治家」の仕事では無かろうか。

してみるとそこには、治世に対する崇高なビジョンが、必要不可欠の条件となる。

国政レベルまでに参加しようとする、政治家さんの存在価値はここにある。

一般庶民には、とても為し得ない崇高な大仕事であるがゆえに、尊敬し、敬意を表す形で、法外な俸給にも、手厚い各種保護策にも、目を瞑っているのである。

それとも国民の意に反して、元々バランス感覚の無い人が政治家となったため、「国民は、かく言う」、「国民が、かく言う」と、国民の声を「虎の威」にして、連呼に連呼を重ね、自分の不甲斐なさをカムフラージュしているのだろうか。

「独善性」の強い国民の声を聞き過ぎた結果、……イヤ、正しくは、政治家本来の職務を放棄した結果、……イヤイヤ、もっと正しく言うと、政治家が本来備え持たなければならない素養を、何も持たない政治家が出現したため、政治が、経済が、社会構造が、そして最も悲劇的には「教育」が、……などの全てシステムが、コントロール不能に陥っているのだと、思えてならない。

コントロール不能な社会は、不気味だ。

不気味は、やがて恐怖に変わる……。

もっとも、それもこれも元はと言えば、国民が選んだ結果なのであるが、……。

『国は、その国の国民以上の国にはなれない』、……何かで読んだ「言葉」を思い出す。

凡句楽